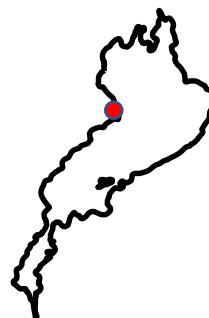


安曇川人工河川の概要と運用について

1 安曇川人工河川について

- ・アユ資源の維持、増大のため、人工的に造られた増殖施設。
- ・コンクリートの水路に産卵に適した粒径の砂利を敷き詰め産卵床としている。

所在地	滋賀県高島市安曇川町北船木
運用開始年	昭和 56 年
産卵床水路	延長 653m 幅 7.3m 高さ 1.0m 勾配 1/700 敷砂利 0.2m
揚水施設	斜流渦巻ポンプ 0.4～0.5 m ³ /秒 φ500mm 3台（うち1台予備）
導水管	管径 温水用 φ800mm 冷水用 φ900mm 延長 温水用 170m 冷水用 285m



2 安曇川人工河川の運用について

運用方法

- ・琵琶湖の水深 5 m（温水 25℃～29℃）と水深 20m（冷水約 12℃）から揚水した水を混合し、産卵に適した水温（16℃～19℃）に調整したうえで水路に通水する。
- ・通水する水量は、流速が 0.5m/秒となるように調整。
- ・通水後に成熟したアユ親魚を収容すると自然産卵し、その後ふ化した仔魚は流れに乗って琵琶湖へと流下する。

近年の運用について

- ・安曇川人工河川への親魚収容量は 8 トンを基本とし、天然での産卵量が少ないと見込まれる場合は、追加で収容する場合がある。
- ・親魚 1 トンあたり 2 億尾のふ化仔魚の流下が見込まれ、運用状況によってはそれ以上の流下がある。
- ・令和 6 年度までは 9 月中旬にふ化仔魚の流下ピークを迎えるよう運用してきたが、猛暑の影響により琵琶湖表層水温が上昇しており、ふ化仔魚の生残に影響がある恐れがあることから、令和 7 年度からは 9 月下旬に流下ピークを迎えるよう運用している。

【参考】

人工河川概略図

